

光と色の春 緑の炎

春のうららに誘われて散策した武蔵野の雑木林の道には、冬枯れの木々の間から柔らかな陽の光を差し込んでいた。陽の輝きが心無しか弱くなったように想えた。日食だった。欠けた太陽を見る算段を考えたが、色ガラスはないし何か工夫はと思いついたのが、年配の人たちには懐かしい針穴写真機の原理だった。落葉の中から大きめのカシワの葉を拾い、小枝で小さな穴を開けて地面に太陽を結ばせたが期待したほどいい形にならなかった。そこで直径一ミリの穴が綺麗に並んでいるテレホンカードで試みたが、これが驚くほど鮮明な象を結び、

日食で欠けた三日月の形となった太陽が穴の数だけずらりと勢ぞろいした。波の性質をもっている光が、小さな穴と通ると回折という現象を起こしてピンホールカメラよろしく逆さの鮮明な象を造ってくれたのである。もし雑木林の木々に葉が茂っていて太陽が頭の上に近かったら、木漏れ日が無数の白い斑を地面に結んで、三日月形に欠けた太陽が重なりあう不思議な情景を見めることができたろう。葉のすき間が無数のピンホールカメラの役目をして日食、木漏れ日、光の回折が重なって巧妙な造形を作りだすのである。

光の回折は雲の微水滴を舞台にプロッセンの妖怪という不思議な姿をみせてくれる。太陽を背にして目の前の雲海に自分の影法師とそれを取り囲

むように虹の環が写り、自分が動けばそれにつれて影と光環が不気味に動く。ドイツのプロッセン山でよく見られるというのでその名の妖怪となったもので、日本では古来、阿弥陀様に後光の環がさしている有様に見えるので「御来迎」という言葉をあてている。芭蕉の奥の細道の旅に随行した弟子の曾良の日記のなかにも、月山登山の折りにこの御来迎を期待したが見えず仕舞で残念がっていた記事がある。

これと同じものが雲海の上を飛ぶ飛行機から見ることが出来る。眼下にひろがる白い雲の絨毯の上に機影が写り、その回りに虹のような光環が取り巻き、プロッセンの妖怪と同じ理屈でできている。薄い雲を通しての朧月夜もほんやりした光の環で囲まれ虹のように色づいているが、これも無数の微水滴による回折によるもので、無数の欠けた太陽を地面に描きだす演出する光のおなじ仲間である。

春や秋の季節、天気悪化の兆しで登場する日カサ月カサの暈(うん)が、同じように虹の環が見えるが色の順番が逆で、光の反射や屈折が原因である。冬から春そして初夏へ向かう季節は光と気象の折りなす不思議な姿が多い。厳冬のオホツクの海からは日の出の太陽が四角や六角、時にはワイナグラスの姿に変形することがある。朱色のワイナグラスは水平線近い空気の温度が途中で鋭く逆転している層ができて太陽を見かけ上半分隠してしまうためである。

四角い太陽も冷たい海に接する冷い濃い密度の

空気がレンズの役目をして縦に引き延ばしたとして説明できる。沖に去った流水が水平線に見える幻水や富山湾の蟹気楼も海が冷たく冷された空気の温度差のレンズによる屈折が演出している。

無数の六角柱の氷晶がそろって浮かんできると六角形の姿をした太陽が現れるが、またナゾのままである。水平線に沈みゆく朱色の太陽の上端が、ほんの一瞬の間、緑色に輝くグリーンフラッシュの現象も緑色の光が水平線付近の空気レンズで屈折されて赤のあとに緑色が目に届くからである。

雪どけ水がかすかに流れたす音の春が響く水の春から、日ごとに陽の足が伸びる光の春、春の光の主役は緑色である。緑は地球上に植物とともに現れた最初の色といわれる。人の目に見える虹の七色の赤から紫までのちようど真中付近の波長に緑色があり、光のエネルギーが最も強い。この原始の色が種子となって黄色や赤の暖色系が育ったといわれている。

日本語の「緑」は、単に草木の新芽の瑞々(みずみず)しいのミズから緑となったといわれおり、「緑の黒髪」はその典型である。青かび、青カエルや青竹、青葉といった具合に緑の色にあたる言葉に青の言葉をあてることが多い。英語でもgreenは緑色のほかに未熟さ青くささなどに使われており、アフリカサバンナの農耕民の中でも新芽の出ばなの危うさを指して、若さのような未熟さに近い意味を込めて使われ総じて青のニュアンスに近い。

列島の早春の冬枯れの野からは、春一番に誘わ

れて最初に湧きだすように咲くのが福寿草の黄色。マンサク、タンポポ、ナタネと続く黄色の前線が北上したあと、桜の季節ともなれば、斉に新芽が萌えだし、冬枯れの木々を新緑の薄いベールで覆っていく。シチイクスピアは「嫉妬は緑色の目をした怪物」と書いているが、モノトンの冬枯れの木々が、躍動する春に嫉妬するような緑の炎で焼き尽くるようである。萌える春は春一番、花に嵐、花散らしの嵐と過ぎて薫風と青風が吹けばもう初夏である。